鼎談
Special Talk

超人的スポーツの強化を ITでサポート

第34回世界トランポリン競技選手権女子個人金メダリスト 森ひかる選手、丸山章子監督に聞く

日本体操協会トランポリン女子強化本部長、
金沢学院大学トランポリン部監督
丸山章子 氏

トランポリン日本代表選手
森ひかる 氏

インテック 代表取締役社長
北岡隆之

2019年12月、世界トランポリン競技選手権で日本選手として初めて金メダルを獲得した森ひかる選手。そして自身もトランポリンのシドニーオリンピック代表として6位入賞を果たし、森選手の所属する金沢学院大学トランポリン部の監督として森選手を支えた丸山章子監督。お2人に、トランポリンとの出合いからその魅力、今後の意気込みや日本選手の強化まで、トランポリン日本代表のトップスポンサーであるインテック社長の北岡隆之が聞きました。

構成・岩元直久　撮影・イマデラガク

偶然の出合いから始まった選手生活

北岡：インテックは2019年から男女トランポリン日本代表のスポンサーをしています。本日は女子日本代表選手である森ひかる選手と、日本体操協会トランポリン女子強化本部長を務め、森選手が所属する金沢学院大学トランポリン部の監督でもある丸山章子さんにお話をうかがいます。まず森選手に、トランポリンを始めたきっかけからお話しいただきたいと思います。

森選手：出身は東京・足立区で、トランポリンをするために高校の途中から石川県金沢市に移りました。初めての体験は、4歳のころに近所のスーパーマーケットの屋上遊園地にあったトランポリンで遊んだことでした。7分200円といった遊び用のトランポリンでしたが、とにかく楽しくて「スーパーに行ったらトランポリンが跳べる！」と、親の買い物によくついて行っていました。

　そうしてトランポリンを楽しんでいるうちに、もっと跳べる環境として母がトランポリンクラブに入会させてくれました。足立区はトランポリンが盛んで、最初に入ったクラブがきっちりと教えてくれたことが今につながっていると思います。

森ひかる氏

トランポリン日本代表選手。 金沢学院大学トランポリン部、同大学人間健康学部スポーツ健康学科3年生。2008年全日本ジュニア選手権低学年の部優勝、2011年世界選手権11～12歳の部優勝。2013年、史上最年少（14歳）で全日本選手権優勝。2018年アジア大会個人2位、同年世界選手権シンクロナイズド優勝。2019年世界選手権個人優勝

丸山監督：トランポリンは基礎が大切なスポーツです。いかに楽しいと感じさせながら基礎を教えるかが育成のポイントなのですが、森選手が入ったクラブはそうした考え方がしっかりできていたのだと思います。

北岡：クラブに入ると、高度なトランポリンの技などを学べるのですか。

森選手：最初に入ったクラブは図書館の上の体育館が会場で、宙返りができない環境でした。基礎を覚えたら、次は宙返りがしたいと、小学1年生のころに宙返りもできるクラブに入って、本格的なトランポリン生活が始まりました。1年生のときから試合にも出ていて、負けず嫌いな性格から負けたくないという強い思いがあったことを覚えています。小学5年生の時に全国大会で優勝できたことで、競技で勝つことへのスイッチが入りました。小学校高学年のときの作文で、将来の夢に「トランポリン選手になって、オリンピックで優勝する！」と書いていたんですよ。

北岡：子どものころから目標が明確だったのですね。丸山監督、選手時代のことをご存知の方には旧姓の古（ふる）選手といったほうが通りがよいかもしれませんが、監督とトランポリンの出合いも偶然だと聞きました。

丸山監督：はい。3歳のころ、母が「ママさんトランポリン教室」に参加しており、まだ小さい私を留守番させることもできず、教室に連れて行っていたんです。そこでママさんたちの休憩時間に私もトランポリンを跳ばせてもらったら楽しくて、もっと跳びたい！　ということになったのです。休憩時間しか跳べないのでは満足できず、子ども向けのトランポリン教室に入れてもらうことになりました。

　金沢はトランポリンの普及が早く、石川県にちょうどトランポリン協会ができたころのことです。その後、小学5年生のときに世界年齢別選手権が金沢であり、10歳以下の部に参加して優勝することができました。楽しくて、本格的に上を目指そうということになりました。

社会から注目されるまでの長い道のり

北岡：その後、日本の代表的な選手として活躍なさるわけですね。

丸山監督：中学３年生のころに世界選手権に初出場し、その後も８回出場しました。1990年からは全日本選手権で個人９連覇をすることもできました。しかし、1992年のバルセロナ、1996年のアトランタのオリンピックでは、トランポリンが正式種目になることはありませんでした。

　そうして迎えた2000年のシドニー大会で、待ちかねていた正式種目に決定しました。しかし2000年は私が27歳になる年で、既に大学院でスポーツ心理学などを学んでおり、そろそろ引退しようかなと考えていたころでもありました。ですが、世界のトランポリン選手と連絡を取り合ったところ、みんな同じように待ちかねていたことがわかり、みんなでオリンピックを目指そう！と決意を固めました。

北岡：オリンピックに出るということで、変わったことはありましたか。

丸山監督：1999年の世界選手権でオリンピックの出場権を獲得しました。そうしたらそれまでトランポリンなんて隣の家の人も知らないぐらいマイナーなスポーツだったのに、取材が殺到しました。一時期は私生活がなくなるほどの取材攻勢で「もう辞めたい」と思ったほどでした。でも、オリンピックに出るということはこういうことなのだと、そのときに実感しました。

森選手：私も2019年の世界選手権で優勝することができて、オリンピックへの出場が決まったのですが、翌朝起きたらテレビのどのチャンネルを回しても自分が映っているんです。SNSのフォロワーも一気に何百人も増えて、世界一になるってすごいことだなと感じました。

北岡：私は1984年にインテックに入社したのですが、そのころ情報産業はまったく認知されていませんでした。新聞の株式欄では運輸業と一緒に掲載されていたぐらいです。そこから90年代にWindows 95が登場してコンピュータやITが身近になって

北岡隆之
インテック 代表取締役社長

インターネットが始まり、皆さんがスマートフォンを使うようになりました。情報産業は30年で一気に広がったんですね。状況が急速に変化して皆さんに知られる存在になるという意味では、森選手、丸山監督の経験に似たところがあるかもしれませんね。

インテックがスポンサーになった理由

丸山監督：インテックには2019年からトランポリン日本代表のトップスポンサーになっていただきました。ありがとうございます。

北岡：インテックは1984年にインテック漕艇部を創部し、国内屈指の実業団ボートチームとして活躍していました。残念ながら諸事情により活動休止となりましたが、スポーツを応援することで社内に一体感が生まれ、さらにスポーツを通して社会に貢献できることを体感しました。

　その後、富山でのスポーツ協賛は行っていたものの、日本代表選手のいるスポーツ団体のスポンサーになる機会がなかったの

丸山章子氏
日本体操協会トランポリン女子強化本部長。金沢学院大学トランポリン部監督、同大学人間健康学部スポーツ健康学科教授。1983年全日本ジュニア選手権優勝、1984年世界年齢別大会個人／シンクロ優勝。1990～1998年全日本選手権個人９連覇。2000年シドニーオリンピック６位入賞

ですが、今回のトランポリン日本代表協賛を通じて、社会貢献や会社の盛り上がりをもう一度実践したいと思っています。インテックの東京本社がある江東区にトランポリン競技会場となる有明体操競技場があるという地域のつながりも理由の１つです。IT企業であるインテックとして、その技術をスポーツに役立てたいという思いもありました。

森選手：世界選手権の日本代表ユニフォームは、トランポリンも体操も同じです。これまで体操の選手のユニフォームには多くのスポンサー企業のロゴが付いているのに、トランポリン選手のユニフォームには何もありませんでした。それが2019年からトランポリン選手のユニフォームにもインテックともう１社の２つのロゴが付きました。スポンサーロゴの付いたユニフォームを着ることは夢でしたし、応援されているんだと感じられて、とてもうれしく感謝しています。恩返しとして、結果を出せるように頑張りたいと思います。

丸山監督：ロゴが付いていると、選手にとって心強いですし、励みにもなります。

そうした支援もいただき、トランポリン日本代表はかなり強くなってきました。男子はもともと強かったのですが、女子も2019年の世界選手権では団体、個人で金メダルを取ることができました。森選手たちが切り開いて世界のトップクラスになってきています。さらに次の世代も向上していけるように強化していかなければいけないと考えています。

北岡：インテックでは、ITを活用した支援も検討しています。トランポリンは、とても厳格な採点基準の下で技を競いますね。「難度点」「演技点」「跳躍時間点」「移動点」＊1を合計して競うのですが、その中でも回転やひねりの回数を点数化する難度点、伸身や屈伸といった技の姿勢を評価する演技点は審査員が目視で採点しています。

そこでインテックは、これまでデータ化されていなかった難度点や演技点に関わる部分をAI（人工知能）などのITを活用して画像解析＊2することで、トランポリンの技術向上につなげる取り組みを進めています。人間の動きをAIで解析するツールは世の中に少なくないのですが、トランポリンの場合はスピードや高さが超人的であることに加え、回転やひねりが短時間に繰り返されます。さらに頭が下になったり足を抱え込んだりといった「普通ではない状況」にもなるので解析もなかなか難しく、競技動画をご提供いただいて、AIモデルを独自に開発しているところです。

丸山監督：トランポリンはデータ活用という部分では遅れている競技だと思います。職人技のコーチングが主流ですが、トランポリン日本代表の強化のためにも情報戦略には力を入れていきたいと思っています。

今は指導するときも、「足がちょっと振り上がっていないね」「上半身を倒すのが早いかな」といった感覚的なやり取りがほとんどです。インテックの技術を使って、例えば「足を上げるタイミングが0.03秒遅い」といったように、データで判断できれば指導に確証が持てます。どこが強くて何が弱いのか、そうしたことがデータからわかれば、森選手の武器にもなりますし、今後の日本代表の強化にもつながると思います。

＊1
難度点：各種目の難易度。回転数、ひねり、姿勢（抱え型、屈伸型、伸身型）によって決まる。審判員が採点。
演技点：各種目の出来栄え。審判員が採点。
跳躍時間点：選手が空中を跳んでいる時間の合計。機械を使用して測定。
移動点：各種目の着地位置。中央部から離れるほど減点される。機械を使用して測定。

＊2　**画像解析**
画像や動画から必要な情報を得る技術。今回のトランポリン競技の場合、競技や練習中の動画から、選手の姿勢（身体や手足の角度）や動き（回転数等）を認識し、数値化・グラフ化することを目指している。

一方でトランポリンでは直感も大事な要素です。この選手は本番に強いといったデータ化が難しい部分も大切です。直感とデータの2つを指標にして戦うときに、インテックにデータの部分をサポートしてもらえると心強いです。

いい演技ができれば結果は付いてくる

北岡：インテックの取り組みを評価していただき、とてもうれしく思います。森選手にとって、積み重ねてきた練習と大会などの本番では気持ちの持ち方は違いますか。

森選手：トランポリンは、1回の演技で10回の跳躍をするのですが、技を連続できなかったり途中で落ちてしまったらそこで演技が終わりになってしまいます。体操もフィギュアスケートも、ミスしてからも演技を続けられますが、一発で演技を決めなければならないところがトランポリンの厳しさです。それだけに決勝などでプレッシャーが掛かると演技が乱れてしまったりすることが少なくありません。「練習は本番のつもりで、本番は練習のつもりで！」と心がけていますが、なかなか難しいです。

小さいときから3回宙返りができて難度点を取れたので、最後まで演技を通せれば優勝できていました。石川県の高校に転校してから、私の武器だった3回宙返りを抜いて難度点がつきにくい演技をすることになりました。基本的なことをちゃんと決めないと勝てないので、しっかりした練習をして、本番でそれを出せるという練習の仕方を身に付けました。

丸山監督：森選手は中学までは、この練習方法で試合ができるの？　とこちらが不安になるような、感覚合わせをする程度の練習をしていたんですね。でも本当に世界で勝とうと思えば、積み上げるものをしっかり積み上げる練習をする必要があります。試合の1カ月前から同じ演技を毎日続けて、試合ではいつも通りの演技ができることが大切です。勝ってもそんなに大きな喜びはないかもしれませんが、心の中でガッツポーズというのが真の勝利者のあり方だと私は教わりました。森選手にも、その闘い方は身に付いているんじゃないかと思います。

森選手：自分のいい演技ができれば、結果は必ず付いてくると思います。優勝できることよりも、練習でやってきたことが本番でできることが一番うれしいです。

北岡：なるほど、練習通りの演技をいかに本番でできるかが重要なのですね。そうやって真摯にトランポリンに取り組んでいる森選手に、最後にトランポリンの魅力を教えていただきたいと思います。

森選手：予選1位、準決勝1位でも、その得点は決勝には持ち越されず、決勝で失敗したら最下位になってしまうんですね。決勝で誰が優勝するかわからない、本番の一発勝負という緊迫感が競技の魅力だと思います。そんなトランポリンですが、そのものの魅力としては、ぷよぷよした感じと、その上でポーンと跳べる感覚です。トランポリンに乗って笑顔にならない人はいないですから。

北岡：確かに跳んだら気持ち良さそうですね。インテックとしては、世界で戦っている競技、表彰台に立てる競技を応援できることが誇らしいことで、すごいことだと感じています。技術を使った貢献だけでなく、魅力にあふれるトランポリンという競技を知ってもらい、見てもらって応援して、選手と一緒に一喜一憂できたらそれこそが感動的なことだと思います。これからもトランポリン日本代表、そして森選手の活躍に期待しています。

第34回世界トランポリン競技選手権金メダルを胸にした森選手と丸山監督、北岡